



Title	韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究 : 場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に
Author(s)	李, 吉鎔
Citation	阪大日本語研究. 2003, 15, p. 67-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7565
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓・日両言語の反対意見表明行動の対照研究

一場の改まり度による表現形式の使い分けを中心に—

A Contrastive Analysis of Refutation Behavior between Korean and Japanese

— the relation between linguistic forms and the degree of formality—

李 吉鎔

LEE Kil-Yong

キーワード：行為指示表現、談話支持ストラテジー表現、フォーマルな場面認識

【要旨】

本稿は、場の改まり度と上下関係を変数として捉え、韓国と日本の大学生を対象に反対意見表明という言語行動における行為指示表現と談話支持ストラテジー表現の使い分けを分析したものである。

その結果、韓国人の大学生はカジュアルな場面とフォーマルな場面とで行為指示表現形式を明確に使い分けることがわかった。フォーマルな場での韓国人のスピーチ・スタイルは、文体が丁寧体になるだけでなく、行為指示表現の選択も異なるものであった。具体的な行為指示表現は、聞き手領域に踏み込まず、聞き手に働きかけない希望文、判断文、非情報提供要求文などである。談話支持ストラテジー表現に注目すると、韓国人はカジュアルな場面でもフォーマルな場面でも、より効果的に聞き手を説得するための表現を多く用いることがうかがえた。しかし、これらは先生という聞き手には、日本に類似した表現形式の使い分けが見られた。

日本人の大学生に関してはカジュアルな場面とフォーマルな場面とで明瞭な使い分けが見られず、行為指示表現の選択でも談話支持ストラテジー表現の使い分けでも聞き手配慮的な言語行動が見られた。

1. はじめに

近年の日本語と諸外国語との社会言語学的手法による対照研究では、同一機能の異形態がどのような条件下でどのような属性の聞き手に用いられるか、などという言語外的な要

因が取り上げられ、各々の言語社会における言語行動の解明が進められてきた。日本語と韓国語を対照した研究も多く、依頼行動、断り行動などの言語行動の異同が具体的に論じられてきた。巖（1999）や韓（2000）は依頼行動、断り行動など韓日の言語行動について多角的に考察を進め、日本人は謝罪表現が多く、間接的に断る表現を多く用いるのに対して、韓国人には直接的な言い方が多く見られると指摘している。

しかし、フォーマルな場面で韓国人がどのような言語行動を行っているのかについては、従来あまり論じられていない。そこで場の改まり度を変数にして、言語行動を捉え直すことも必要であろう。例えば、大学生の話し手が参加している学科の催しについて、場所を変えたいと思い、担当者の聞き手に提案する場合を考えてみよう。話し手は聞き手との人間関係や聞き手の負担に配慮し、さらに提案をするという目的の達成のための戦略を考え、また提案を行う場の性質をも考え合わせて、最も相応しい表現を選択するわけである。まず、カジュアルな場面で、親しい友人が聞き手の場合の具体的な行為指示表現は、次の例(a)、(b)のようであろう。

(a) 場所 変えろよ。

(b) 場所 変えよう。

このようなくだけた感じの話し方がされることは普段経験することである。しかし、これが学生会議といったフォーマリティの高い場面となると、例え親しい友人が聞き手であっても、(c)、(d)、(e)のような発話が為されるのではないだろうか。

(c) 場所を変えてもいいんじゃないですか？

(d) 場所を変えた方がいいと思います。

(e) 場所を変えてみたいんですけど。

カジュアルな場面での(a)、(b)と、フォーマルな場面での(c)、(d)、(e)とでは、発話のフォーマリティを指標する「デスマス体」の有無、格助詞の脱落非脱落などが観察される。

もう一点、考察に値するものに、各表現が持つ聞き手に対する話し手の言語的影響力が挙げられよう。(a)から(e)までの表現群は、提案をするという一つの機能としてまとめられ、同一機能の異形態とでも言えるものであるが、各表現が聞き手にどの程度働きかけるかという表現の持つ言語的影響力はそれぞれ異なるものである(宮地1995)。(a)の訴え型(命令文)は聞き手の行為の実現を訴えかけるもので、聞き手に働きかける言語的影響力が大きく、聞き手領域に深く踏み込んだものである。一方、(e)の演述型は、言語的影響力が話し手領域にとどまるものであり、聞き手に働きかける影響力は小さいと考えられる。つまり、聞き手に対する言語的影響力は、カジュアルな場面ほど大きく、フォーマル

な場面になるにつれ、小さくなることが予想される。

本稿では、反対意見を表明し、新しい提案を行うという目的指向的な言語行動を取り上げ、カジュアル／フォーマルといった場の改まり度と上下関係を変数として捉え、韓国と日本の大学生における言語行動の対照研究を行う。具体的に以下の2点を目的とする。まず、韓国と日本の大学生の言語行動における具体的な行為指示表現形式と談話を構成するストラテジー表現が、カジュアルな場面とフォーマルな場面とでどのように変わるのかについて論じ、次にカジュアルな談話とフォーマルな談話とでは、単にスピーチ・スタイルが変わるだけでなく異なる行動規範に基づく世界として区別して考えるべきだという指摘（鈴木1997）の検証を試みたいと思う。

2. データおよび分析項目

2. 1. 調査およびデータの概要

データは韓国と日本で1999年度にそれぞれ50人の大学生を対象に実験形式のインタビュー調査を行って得られたものである。反対意見表明行動に関する刺激文の作成に際しては、韓国ではMT¹⁾に関する話題、日本ではゼミ旅行に関する話題を設け、反対意見表明の理由として、「費用の問題」「場所の問題」「評判の問題」の3つをあらかじめ提示している。話題以外の他の要素は韓日の間で統一してある。なお、聞き手の設定は、上下関係（先生、先輩、同級生、後輩）に親疎関係をクロスさせた実在する人物の8人を想定してもらっている。調査時の刺激文については本文末の資料を参照されたい。

インタビュー調査は、まず各聞き手に対して反対意見を表明するか否かの意識を調べ、次にインフォーマントに具体的なシチュエーションを想起してもらい、聞き手別に反対意見を具体的に言ってもらう形で行った。カジュアルな場面は聞き手と二人でくつろいでいる時を、フォーマルな場面は学生会議を想定してもらった。ここで想定してもらった学生会議とは、学生が主体であるが、学科の行事を決めるため先生や先輩など学生会執行部が参加するものである。

なお、調査時にはインフォーマントにピンマイクをつけてもらい、テープレコーダーは隠している。そして、confrontationの問題が起こらないように、調査者はインフォーマントと90度の位置に座っており、インフォーマントのスムーズな発話を誘導するため、無言のあいづち（首の縦振り）を打っていることを報告しておく。

2. 2. 分析項目とデータの限定

分析単位の設定にあたっては、発話の行為的機能と密接に結びついた「move」という単位（中田1990）を参考にし、話し手によって発話された内容が何について述べられているかという、内容的にまとまった発話を分析の単位とした。具体的には、本稿で扱うデータは一人の話し手が話し続ける性格を持っているため、各単位内に動詞などの述語を含むことと、意味的にまとまりがあることを必須条件とした。したがって、談話の構造に影響を及ぼさず任意性の強いもの、すなわち呼びかけ語やfiller、hedge表現などは対象外とした。

その他、「反対意見の不表明」、「提案の不提示」は無効回答と処理した²⁾。これらの無効回答は、強いFTA発話行為という反対意見表明行動の性質によるものと考えられる。すなわち反対表明行動は、聞き手にすでに意見が存在していることを前提とし、反対意見を表明することによって、聞き手の意見や行動を規制するものである。反対意見表明は言うまでもなく、Brown & Levinson (1987) の言う強いFTA発話行為であり、対人関係の維持、及び破綻に大きく関わると予測される。したがって、自分の意見が反対される聞き手のフェイスに対する配慮など、対人関係上の慎重な言語行動が要求され、その結果「反対意見の不表明」、「提案の不提示」といった行動がとられると考えられる。

本来、言語行動を把握するためには、相手との接触拒否や当該言語行動を行わないことも含めて総合的に考察すべきであり、また具体的な提案を行わないものは、間接的な提案の仕方として扱うことも考えられるが、本稿では明示的な言語表現の使い分けを把握するのが先決だと思い、直接的に提案を行っているものに限定した。

また、親疎関係による使い分けは程度の差こそあるものの、上下関係による使い分けほど明瞭でなく、本稿の論旨に影響を及ぼすことはなかった。そのため、疎の関係のデータを割愛し、親しい人に対するデータのみを分析対象とする。カジュアル／フォーマルという場の改まり度と上下関係をクロスさせた有効回答を表1に示す。

表1 有効回答

場面 \ 聞き手	先生	先輩	友人	後輩
〈韓国・カジュアル〉	43	42	45	45
〈韓国・フォーマル〉	37	48	47	46
〈日本・カジュアル〉	41	43	48	35
〈日本・フォーマル〉	34	41	42	35

(単位：人数)

以下、次の順序で結果をまとめ、考察を進めることにする。まず、§3では反対意見表明行動の構成要素についてまとめ、§4では場の改まり度による行為指示表現の使い分けの韓日対照を行う。さらに§5では場の改まり度による談話支持ストラテジー表現の使い分けについて考察を行う。

3. 反対意見表明行動の構成要素

本節では、反対意見表明行動の構成要素についてまとめる。本稿で取り扱う反対意見表明という目的指向的談話は自由談話と異なり、そこで話されるトピックもその展開もほぼ一定である。談話データを「談話支持ストラテジー表現」³⁾、「理由節」、「提案節（行為指示表現）」の3つの部分に分類した⁴⁾。以下、3つの部分について説明する。

3. 1. 談話支持ストラテジー表現

談話支持ストラテジー表現は、主に反対意見表明行動を導入する表現であり、談話レベルの要素である。対人関係に配慮したFTA緩和ストラテジー、より効果的な説得のためのストラテジー、聞き手の理解の補助をねらったストラテジーなどの機能を果たしており、16種に分類される。

3. 1. 1. FTA緩和ストラテジー表現

まず、FTA緩和ストラテジー表現とは、主にFTA（相手のフェイスを脅かす行為）の緩和を目的に使用されたもので、フェイスに対する脅威を軽減し、さらに補償するために採用されるストラテジーを指す。話し手がへりくだった言い方をしたり、謝罪をしたりする表現や、聞き手の意見を尊重した表現、これから反対する意見について一時的であれ賛成を表明する表現も見られる。以下に各表現の代表例をあげる。

- A. へりくだり表現：「エー 私が言うのも マ そういう筋合いでもないかもしれないけど。」
[JF-CA-105-疎・下]⁵⁾
- B. 謝罪表現：「(エート あの 先生) すみません。」 [JM-CA-112-親・先生]
- C. 聞き手尊重表現：「こう マ それなりに決めたことだと思うけど。」 [JM-CA-137-疎・下]
- D. 見せかけの賛成：「そこもいいとは思いますが。」 [JF-CA-109-親・上]

3. 1. 2. より効果的な説得のためのストラテジー表現

次に、より効果的な説得のためのストラテジー表現には、問いかけ表現、問いつめ表現、根拠付け表現、協力表明表現、協力放棄表現、禁止表現、脅かし表現などがあり、これらは反対意見表明行動を行うに当たって、より効果的に目的を達成するための表現群である。問いかけ表現、問いつめ表現は、相手の意見を再確認し、相手の意見を批判的にとらえるものである。これらは聞き手に直接的な返答を要求するものではなく、聞き手の意志・行動を批判し、攻撃するのが主な目的であり、自分の意見が受け容れられやすいように基礎をつくるものと考えられる。根拠付け表現は、反対意見は自分だけのものではなく、他の多くの人も自分に同調しているのだという話し手の反対意見への根拠付けを行っているものである。さらに、例は少ないが、担当者の聞き手に協力を表明する、あるいは協力を放棄するといった表現や、聞き手の行動を禁止したり、脅かししたりする表現もより効果的な説得のために用いられるものと考えられる。

- E. 問いかけ表現：「エ 今年ってもうこれはこうやって行くって言うのも、ほとんど決定なん？」 [JM-CA-122-疎・下]
- F. 問いつめ表現：「今までもこういうところ行って、全然いやじゃなかったですか？」 [JF-CA-104-親・上]
- G. 根拠付け表現：「저희 친구들끼리 많이 얘기를 해봤는데요. (私たち友達同士でいろいろと話をしてみたんですが。)」 [KF-CA-130-親・先生]
- H. 協力表明表現：「그러니까는 다른 데 제가 뭐 알아볼테니까. (だから違うところ、私が調べてみますから。)」 [KM-CA-105-親・上]
- I. 協力放棄表現：「뭐 바꾸지 않는다면 나 안갈래. (変えないのであれば私は行かないよ。)」 [KM-CA-142-親・同]
- J. 禁止表現：「고집부리지마 그냥. (我を張るな、もう。)」 [KM-CA-125-親・同]
- K. 脅かし表現：「저 가면 애들한테 맞아죽는다 새까 어? (そこ行ったら、みんなに殺されるぞ、こら。)」 [KM-CA-137-親・同]

3. 1. 3. 聞き手の理解の補助をねらったストラテジー表現

そして、聞き手の理解の補助をねらったストラテジー表現は、意見保持表明、反対意見保持表明、話題言及表現、場面言及表現、内容言及表現などであり、聞き手の理解の補助をねらい、表現・伝達の過程とその内容の調整に配慮したストラテジーである。

- L. 意見保持表明：「ト これは個人的意見なんですが。」 [JF-CA-115-疎・上]
- M. 反対意見保持表明：「ウン 実は僕は反対意見を持っています。」
[JM-CA-111-親・上]
- N. 話題言及表現：「アノー ト 今回のゼミ旅行の行き先なんですけれども。」
[JF-CA-105-疎・上]
- O. 場面言及表現：「マ せっかく マ 今こういう話し合いをしているし。」
[JM-F0-121-疎・上]
- P. 内容言及表現：「マ だいたい多数意見が通って マ 先生の力が絶対やから マ
それに従わなあかんのわかるけど。」 [JM-CA-146-疎・同]

3. 2. 理由節

理由節には、聞き手の意見に反対する理由、反対することがらに対する話し手の評価、の2つが含まれる。理由節では、まず、反対することがらに対して新しい提案を行うための理由付けが行われるが、調査時の刺激文において、反対意見表明の理由として、「費用の問題」「場所の問題」「評判の問題」の、3つをあらかじめ提示しているため、主にこれらの3つが理由節の大半を占めている。例(1)はゼミ旅行に行く場所に言及したものである。例(2)はゼミ旅行に行くのに費用がかかるという内容について言及したものである。

- (1)「エート いつもなんか同じ場所に行ってるんで。」 [JF-CA-101-親・上]
- (2)「あそこがちょっとー 予算的にかかりすぎるんちがうかなと思うんだけど。」
[JF-CA-105-親・同]

次に、反対することがらに対する話し手の評価は、前述の理由付けに付随する形で現れることが多い。この理由節の評価は、「費用」「場所」「評判」といった反対することがらと密接に関わっており、反対意見を表明する下地をつくる談話支持ストラテジー表現とは異なるものである。例(3)のように話し手自身の感情を述べたり、例(4)のように関わりのある第三者やみんなの評価を話し手が代弁する形で述べたりする。

- (3)「すごくいやなんだけど。」 [JF-CA-104-疎・同]
- (4)「あまり場所的によくないというのがみんなの意見なんですが。」
[JF-CA-115-親・上]

3. 3. 提案節（行為指示表現）

提案節では反対することがらに取って代わる新しい提案が行われる。ここでは具体的に提案を行う時の表現を行為指示表現と称し、表現類型のモダリティの具体形として考える（§ 4で後述）。以下のような行為指示表現が確認された。

(5) 「ウン エー 僕はほかの場所にも行ってみたいです。」 [JM-CA-123-疎・上]

(6) 「何か別の場所に変えてみようか思わへん？」 [JF-CA-133-疎・下]

(7) 「もっと他にいいところいっぱいあると思うんですよ。」
[JF-CA-101-親・上]

(8) 「たまにはちゃうところにしてみましようよ。」 [JM-CA-138-親・上]

以下に全体の談話例を示す。談話例において、点線部は談話支持ストラテジー表現、実線部は理由節、二重下線部は提案節を示す。

〈韓国語談話例〉 [KF-CA-106-親・同] (日本語訳筆者。原文の発話の意味を忠実に残した)

① 선희야, ② 우리 애틀티 딴 데 가자. ③ 거기 왜 가? ④ 별로 재미없고, ⑤ 애들도 막 가기 싫어하는데, ⑥ 좀 우긴 거 같애. ⑦ 글루 가지 말자.
① ソンヒ（呼びかけ）、② MT違ふところに行こう。 ③ どうしてあそこに行くの？ ④ あまり面白くなくて、 ⑤ みんなもいやがっているし、 ⑥ ちょっとおかしい。 ⑦ あそこ行くのはやめよう。

〈日本語談話例〉 [JF-CA-115-親・下]

① 今度のゼミ旅行なんだけどね、 ② あそこは私たちも毎年あそこに行ってるけど、 ③ あそこはウン行ったらわかると思うんだけど、 ④ 費用のわりにそんなによくないと思うの。 ⑤ もしかしたら他にも費用がもっと安くていいところを探したらあるかも知れないから、 ⑥ もし時間があつたらそういうところ探して別の場所にしてほしいんだけど、 ⑦ お願いできるかな。

本稿では、談話支持ストラテジー表現として韓国語談話例③と日本語談話例①・③を分析対象とし、行為指示表現としては韓国語談話例②と日本語談話例⑥を分析対象とする。日本語談話例のように、提案節が二つ以上の行為指示表現で構成される場合もあるが、その場合は最も聞き手目当て性の強い行為指示表現を対象とした（§ 4. 4で後述）。なお、理由節については、調査時において反対理由をあらかじめ提示しており（§ 3. 2参照）、場の改まり度による使い分けが明瞭ではなかったため、分析から除外する。

以下、§ 4では韓国と日本のカジュアルな場面とフォーマルな場面での行為指示表現の使い分けについて、結果をまとめ、解釈を行う。§ 5では、談話支持ストラテジー表現がカジュアルな場面とフォーマルな場面とでどのように使い分けられるかについて見ていく。

4. 場の改まり度による行為指示表現の使い分け

本稿では、行為指示表現を表現類型のモダリティの具体形として考えるものである。益岡（1991）は表現類型のモダリティを、話し手の発話・伝達の態度のあり方に基づいて「感嘆型（感嘆文等に対応）、情意表出型（同希望文）、演述型（同判断文等）、疑問型（同情報提供要求文、非情報提供要求文）、訴え型（同命令文、依頼命令文、勧誘文）」と分類している。以下では、§ 4.1でカジュアルな場面、§ 4.2でフォーマルな場面、§ 4.3ではフォーマルな場面の認識を取り上げ、結果と解釈を施す。さらに、§ 4.4では行為指示表現の影響力について、韓国と日本の比較を行う。

4. 1. カジュアルな場面の行為指示表現

ここでは分析対象発話の行為指示表現をまとめ、韓国のカジュアルな場面（以下、〈韓国-カジュアル〉）と日本のカジュアルな場面（〈日本-カジュアル〉）を比べる。

4. 1. 1. 結果

図1 行為指示表現〈韓国-カジュアル〉

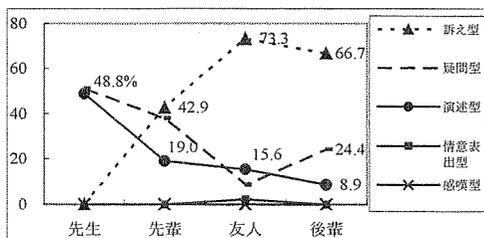
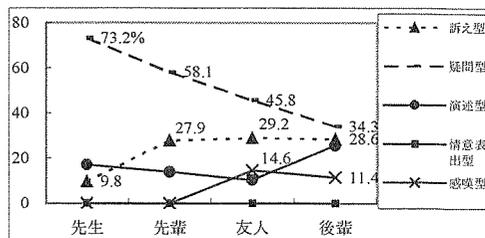


図2 行為指示表現〈日本-カジュアル〉



- (1) 図1 〈韓国-カジュアル〉では、友人、後輩が相手の時に訴え型が圧倒的に多く、先生には訴え型が全く用いられていない。その反面、先生に対しては疑問型や演述型がそれぞれ約50%近く現れている。
- (2) 図2 〈日本-カジュアル〉ではすべての聞き手に対して疑問型が最も多い。しかし、友人、後輩に対しては疑問型が減少し、感嘆型や訴え型が若干増える。

4. 1. 2. 解釈

(a) 〈韓国-カジュアル〉において親しい友人、後輩には聞き手領域に踏み込んだ発話をすることが許され、なおかつそのような言語行動が親しさを指標することにもなる。例(9)、例(10)のような表現であるが、多くの韓日の言語行動の対照研究ではこのような韓国人のカジュアルな言語行動が強調されてきたと思われる(敵1999、韓2000等)。

(9) 訴え型(命令文) : 「이번엔 좀 바꿔 봐라. (今回は変えてみる。)」

[KF-CA-131-親・下]

(10) 訴え型(勧誘文) : 「야, 좀 다른 데로 가자. (おい, ちょっと違うところに行こう。)」

[KF-CA-138-親・同]

(b) 一方、先生に対しては行為指示表現の選択のパターンが異なるが、韓国の儒教文化的背景から説明できよう。韓国では文化的に先生の権威が高く、先生に対して働きかけるよりは先生の働きかけを受けるべきであるという図式が一般的な認識として成立している。その結果、先生に強く働きかける訴え型に対しては回避義務⁹⁾が働き、先生の意見を打診する疑問型(例(11))や自分の意見を述べるのみにとどまる演述型(例(12))が多く用いられる。目下は目上の前では口数を控え、ことばで意思表示をするよりも、黙って拝聴の態度をとることが礼儀とされているという指摘(任・李1995)と一致した結果である。

(11) 疑問型(非情報提供要求文) : 「새로운 데로 가시는 게 어떻겠습니까? (新しいところに行かれるのはいかがでしょうか。)」

[KM-CA-118-親・先生]

(12) 演述型(陳述文) : 「이번에는 새롭게 했으면 좋겠습니다. (今回は新しくしたらいいと思います。)」

[KF-CA-133-親・先生]

(c) 〈日本-カジュアル〉ではすべての聞き手に疑問型が最も多いが(例(13)、例(14))、聞き手に一方的に押しつけない聞き手配慮型の言語行動が望ましいという認識があるからではないだろうか。話し手が自分の意見を述べた後に、相手の意見を伺い、お互いに歩み寄っていくという協調的な言語行動の現れと思われる。

(13) 疑問型(非情報提供要求文) : 「場所を変えてもいいんじゃないでしょうか。」

[JF-CA-136-親・先生]

(14) 疑問型 (情報提供要求文) : 「ほかにもいいとこなかった？」 [JM-CA-145-親・同]

(d) 一方、友人、後輩には例(15)、例(16)のような感嘆型が少数ながら現れている。この感嘆型は、益岡(1991)で伝達性なしの非対話文として分類されているものである。話し手が伝達性を持たない非対話文を用いるのは、あたかも聞き手に向けられていない発話のように見せかけながら、聞き手に聞こえているから分かってくれるはずだという語用論的機能に委託しているものと考えられる。そして、聞き手に対する押しつけを軽減する究極的な方法として用いられ、negative politeness strategyとして働いていると思われるものである。また、話し手が伝達性を持たない非対話文を用いると、あたかも聞き手に向けられていない発話のように見せかけるため、目上の人を相手には使いにくく、目下の人を相手にした場合に多く現れるのである(三牧2000)。

(15) 感嘆型 (感嘆文) : 「違うところも行ってみたいなー。」 [JF-CA-136-親・下]

(16) 感嘆型 (感嘆文) : 「場所 変えたらどうかなー。」 [JF-CA-105-親・同]

4. 2. フォーマルな場面の行為指示表現

韓国のフォーマルな場面(以下、〈韓国-フォーマル〉)、日本のフォーマルな場面(〈日本-フォーマル〉)における行為指示表現を分類すると、図3、図4のようになる。

4. 2. 1. 結果

図3 行為指示表現〈韓国-フォーマル〉

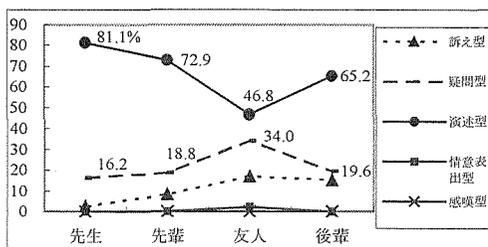
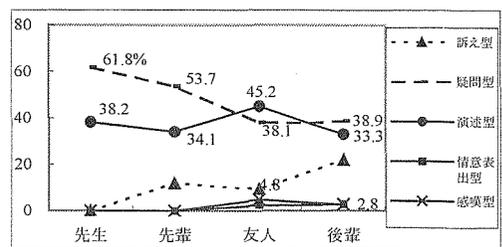


図4 行為指示表現〈日本-フォーマル〉



(1) 図3〈韓国-フォーマル〉では、すべての聞き手に演述型が特徴的であり、演述型に次いで疑問型が多い。

(2) 図4〈日本-フォーマル〉でも疑問型が一番多く、§4.1.1の図2〈日本-カジュアル〉と同様の曲線を描いている。しかし、図2〈日本-カジュアル〉では、先輩以下友人、後輩で訴え型が演述型を上回るが、図4〈日本-フォーマル〉では

演述型が多くなる。

4. 2. 2. 解釈

(a) 〈韓国-カジュアル〉では親しい友人、後輩には聞き手領域に踏み込んだ発話（訴え型）が許される一方で、先生に対しては疑問型や演述型が主なものであった。しかし、〈韓国-フォーマル〉では、相手に働きかけない演述型が特徴的である（例(17)、例(18)、例(19)）。しかも、演述型に次いで疑問型が多く見られる。これは、フォーマルな場面では聞き手領域に踏み込んだ発話に対して回避義務が生じ、自分の意見を述べるにとどまり、相手の意見を打診するといったフォーマルな場面に相応しいスピーチ・スタイルが存在することを伺わせるものである。

(17) 演述型（判断文）：「다른 데로 갔으면 좋겠습니다. (違うところに行ったらいいと思います。)」 [KM-F0-137-親・同]

(18) 演述型（判断文）：「새롭게 했으면 좋을 거 같은데요. (新しくすると良いと思いますけど。)」 [KF-F0-120-親・下]

(19) 演述型（陳述文）：「장소를 옮겼으면 좋겠다는 생각을 가지고 있습니다. (場所を変えたら良いという考えを持っています。)」 [KF-F0-150-親・先生]

(b) 〈日本-カジュアル〉においても親しい人には聞き手領域に踏み込んだ発話（訴え型）が若干見られたが、〈日本-フォーマル〉ではこのような言語行動は控えられ、話し手の意見を述べるのみにとどまる演述型が好まれる。しかし、韓国人と比べると、カジュアルな場面とフォーマルな場面とで、スピーチ・スタイルの違いがはっきりしない。これは、反対意見表明行動が強いFTA発話行為であるため、カジュアルな場面、フォーマルな場面ともに聞き手配慮型の言語行動が行われているのではないかと思われる。

4. 3. 韓国におけるフォーマルな場面の認識

図3 〈韓国-フォーマル〉では演述型が特徴的であったが、親しい友人が聞き手になった場合にその出現率が46.8%と比較的低いように思われる。ここでは普通体、丁寧体といった文体に注目し、「フォーマルな場面の認識」を取り上げる。

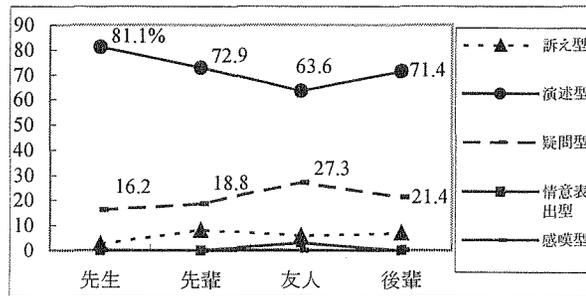
日本語と韓国語において、文体としての丁寧体は場面の公的formalityを指標するものである（井出・桜井1997）。韓国語ではカジュアルな場面で友人や後輩にすべて普通体が

用いられていた。フォーマルな会議場面で丁寧体にシフトした人は発話の行われた場をフォーマルな場として捉えたことは明らかである。しかし、普通体を用いた人に関しては、フォーマルな場として捉えなかった可能性とともに、フォーマルな場として捉えた上で普通体を用いた可能性も考えられるため、断定はできない。

ここでは、話し手がフォーマルな場面と認識したと認められる丁寧体にシフトした人に限定して、〈韓国-フォーマル〉に特徴的なスピーチ・スタイルとはどのようなものか、具体的に見ていきたいと思う。

4. 3. 1. 結果

図5 行為指示表現〈韓国-フォーマルな場面認識〉



(1) 図5は、フォーマルな場面認識をまとめた結果であるが、§ 4. 2. 1 図3と比べると親しい友人・目下を相手にする場合に演述型が確実に増えている（友人に16.8%、後輩に6.2%）。

(2) 表2、表3は、友人、後輩に対する談話の中に現れた丁寧体（表中で+と表記）・普通体（表中-）を調べたものである。表2、表3のカジュアルな場面ではすべて普通体が用いられているため、特に記号は用いていない。

表2 韓国-対友人

〈カジュアルからフォーマルへ移行〉

Casual	Formal										
	情意表出型		演述型		疑問型		訴え型		×		計
	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	
情意表出型											1
演述型			4	1		2					4
疑問型			2		1		1				3
訴え型	1		13		7	3	2	5	2		25
×			2		1	1			1		4
計	1		21	1	9	7	2	6	3		36

表3 韓国-対後輩

〈カジュアルからフォーマルへ移行〉

Ca	Fo									
	演述型		疑問型		訴え型		×		計	
	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-
演述型	3	2					1		3	3
疑問型	4	1	2	2						6
訴え型	13	5	3		1	4	4			21
×		2	1	1	1					2
計	20	10	6	3	2	5	4			32

（表中で、×は非表明を、空欄は出現0（zero）を表す）

この表からは、カジュアルな場面からフォーマルな場面に移行したとき、文体が普通体から丁寧体に変ったか、あるいは普通体が維持されたかわかる。結果は次の通りである。普通体から丁寧体に移行した人は、表現類型も同時に演述型に移行した人が最も多く（表2；17例、表3；17例）、次いで疑問型が多く選択される（表2；8例、表3；4例）。また、普通体を維持した人でも、表現類型では、演述型・疑問型に移行している（表2；13例中7例、表3；14例中9例）。

4. 3. 2. 解釈

(a) (1)の結果から、韓国人は発話の行われる場をフォーマルな場面と捉えたと、§4. 2. 2例(17)、例(18)、例(19)のようにフォーマルな場に相応しいスピーチ・スタイルを規範的に用いていると考えられる。

(b) (2)の結果から、韓国人のフォーマルなスピーチ・スタイルとは、文体のみが丁寧体になるものではなく、行為指示表現までもが変わるものであると判断できる。さらに、少数ではあるが、カジュアルな場面とフォーマルな場面とともに訴え型を選択した人に注目すると、そのほとんどが普通体を用いている（表2；7例中5例、表3；5例中4例）。このことから、文体の選択と行為指示表現の選択が一致していることがわかる。

4. 4. 韓日両言語における行為指示表現の影響力

ここでは、各々の表現が持つ聞き手に対する話し手の言語的影響力の度合いというスケールを設け、行為指示表現を表4のように分類する。

表4 行為指示表現の聞き手に及ぼす影響力

影響力	行為指示表現	意味内容
7	訴え型（命令文・依頼命令文）	聞き手の行為を要求する機能を果たすもの。話し手の行為を含まず、相手の行為のみを要求するもの
6	訴え型（勧誘文）	聞き手の行為を誘う形を取り、話し手自身の行為を含むもの
5	疑問型（情報提供要求文）	聞き手に情報の提供を要求する働きをするもの
4	疑問型（非情報提供要求文）	聞き手に情報の提供を要求するものではなく、聞き手の行う行為に示唆を与える働きをするもの
3	演述型（陳述文・判断文）	話し手の知識を聞き手に情報として提供するもの
2	情意表出型（希望文）	発話時に話し手の内面に有する感情や感覚などを情報として聞き手に伝える働きをするもの
1	感嘆型（感嘆文・詠嘆文）	発話時に話し手の内面に有する感情や感覚などを発するもの。本来的に伝達機能を備えていないもの

以下7段階のスケールについて説明する。§4で述べたとおり、行為指示表現とは表現

類型のモダリティの具体形（「感嘆型、情意表出型、演述型、疑問型、訴え型」）として考えるものである。本稿では、この話し手の発話・伝達的態度のあり方、つまり言語活動の基本的単位である文がどのような類型的な発話・伝達役割・機能を担っているのかの表し方に関する文法表現に語用論的な意味合いを付与したものである。

影響力1と判断した感嘆型は益岡（1991）で非対話文と位置づけられ、特定の聞き手に語りかけるという面を持たず、せいぜい自分自身に訴えるという段階にとどまるものである（§ 4. 1. 2 例(15)、例(16)）。しかし、現実の会話ではあたかも聞き手に向けられていない発話のように見せかけながら、聞き手に聞こえているから分かってくれるはずだという語用論的機能に委託し、聞き手に対する押しつけを軽減する方法として用いられることがしばしばある。

また、聞き手の行為を要求する訴え型を語用論的に再解釈すると、聞き手の意見や欲求にかまわず直接的に聞き手の行為を促すものであり、最も聞き手目当て性の強い行為指示表現である。そのため、訴え型を用いることは聞き手領域に踏み込んだ発話になるが、それを用いることができることは、親しい仲の証であるという親しさの指標にもなり、また、目上を相手にした場合には控えられるのであろう。この訴え型は影響力6、7に分かれるが、話し手を含めて聞き手の行為を誘うもの（影響力6（§ 4. 1. 2 例(10)））と聞き手に直接的な形で命令・依頼し、聞き手の行為のみを要求するもの（影響力7（§ 4. 1. 2 例(9)））の違いによる。

疑問型は話し手の言語的影響力4と5に分かれる。影響力5（§ 4. 1. 2 例(14)）は聞き手に情報の提供を要求するもので、情報提供要求文とされるものであり、影響力4（§ 4. 1. 2 例(13)）は聞き手に情報提供を要求するというより、聞き手の行うべき行為を暗示する非情報提供要求文である。

本稿では、構造的な文法表現をコミュニケーション的アプローチから語用論的に再解釈し、聞き手との関わりの中で、ある表現を発する時の話し手の言語的影響力に注目したものであることを改めて強調したいと思う⁷⁾。

しかしながら、本稿で数値化した聞き手に働きかける言語的影響力の度合いは絶対値ではなく、表現形式間の相対的なものであり、一つの目安として働くものであることを断っておく。

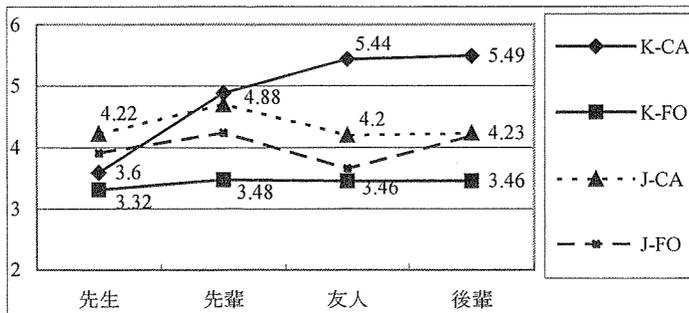
4. 4. 1. 結果

図6の中の、〈韓国-フォーマル〉は§ 4. 3. 1で整理した、フォーマルな場面で丁寧体にシフトしたインフォーマントのデータを用いる。普通体を維持しているインフォーマ

ントは、改まった場と捉えたかどうか不明なためである。

- (1) 〈韓国-カジュアル〉では友人、後輩に対して影響力5を越える結果となり、先輩に対しても影響力5に近い数値が現れている。
- (2) 〈韓国-カジュアル〉と〈韓国-フォーマル〉の間で顕著な差が認められるが、先生に対してはほとんど差がなく、日本よりも影響力の値が低い。
- (3) 〈日本-カジュアル〉と〈日本-フォーマル〉では、行為指示表現間の差が小さく、同様の曲線で描かれる。

図6 韓・日両言語における行為指示表現の影響力



4. 4. 2. 解釈

(a) 〈韓国-カジュアル〉では、聞き手に行動を要求し、誘う訴え型や、疑問型の中でも情報提供要求文など聞き手領域に深く入り込む形式を多用する結果であろう。しかし、先生に対してはカジュアル場面とフォーマル場面の両方において、日本よりも影響力の値が低く、先生には働きかけてはいけないという規範が存在すると考えられる。任(2000)の指摘とおり、韓国人は日本人に比べ、一般的に積極的な伝達態度をとっているものの、これは目上の前では強く規制された上での言語行動の特徴であると思われる。

(b) 〈韓国-フォーマル〉に特徴的なスピーチ・スタイルは、聞き手領域に踏み込まず、聞き手に働きかけないものである。具体的な行為指示表現は、聞き手領域に踏み込まず、聞き手に働きかけない希望文、判断文、非情報提供要求文などである。

(c) 〈日本-カジュアル〉と〈日本-フォーマル〉の差が小さいことは、フォーマルな場面ではもちろんのこと、カジュアルな場面においても聞き手領域に踏み込まないように配慮している結果ではないだろうか。日本人は婉曲な言い方をするという従来の指摘はカジュアルな場面・フォーマル場面を問わず認められると言えよう。

5. 場の改まり度による談話支持ストラテジー表現の使い分け

これまでの分析で、韓国人の言語行動は、カジュアルな場面とフォーマルな場面とで著しく異なることがわかった。本節では、談話支持ストラテジー表現がカジュアルな場面とフォーマルな場面とでどのように異なるのかを見てみたい。

5. 1. 結果

表5、表6は§ 3. 1で分類した談話支持ストラテジー表現の中から、出現頻度の高いものを取り上げ、聞き手別にまとめたものである。韓国と日本のカジュアルな場面とフォーマルな場面を比較すると以下のことが言えよう。

表5 韓国の主な談話支持ストラテジー表現

ストラテジー機能	主な支持ストラテジー表現	〈韓国-カジュアル〉				〈韓国-フォーマル〉			
		先生	先輩	友人	後輩	先生	先輩	友人	後輩
FTAの緩和	見せかけの賛成	6.9%	-	-	-	6.7%	-	-	-
	聞き手尊重表現	-	2.1%	2.0%	20.6%	4.4%	14.0%	5.4%	20.0%
効果的な説得	問いつめ表現	3.4%	40.4%	49.0%	17.5%	-	-	8.1%	-
	根拠付け表現	17.2%	25.5%	4.1%	14.3%	17.8%	30.2%	40.5%	40.0%
聞き手の理解補助	(反対) 意見保持表明	15.5%	-	-	4.8%	33.3%	27.9%	24.3%	14.3%
	話題 (内容) 言及表現	55.2%	23.4%	22.4%	22.2%	35.6%	27.9%	16.2%	20.0%

(出現頻度の高いもののみを取り上げたため、総計は100%にならない。表中の-は使用率0 (zero) を表す)

表6 日本の主な談話支持ストラテジー表現

ストラテジー機能	主な支持ストラテジー表現	〈日本-カジュアル〉				〈日本-フォーマル〉			
		先生	先輩	友人	後輩	先生	先輩	友人	後輩
FTAの緩和	見せかけの賛成	-	2.8%	-	8.7%	14.7%	-	5.0%	16.7%
	聞き手尊重表現	2.9%	-	-	-	5.9%	9.5%	5.0%	3.3%
効果的な説得	問いつめ表現	5.7%	2.8%	3.6%	8.7%	-	4.8%	5.0%	3.3%
	根拠付け表現	8.6%	-	3.6%	-	14.7%	28.6%	5.0%	10.0%
聞き手の理解補助	(反対) 意見保持表明	8.6%	13.9%	7.1%	-	17.6%	9.5%	20.0%	33.3%
	話題 (内容) 言及表現	71.4%	50.0%	85.7%	78.3%	38.2%	47.6%	55.0%	33.3%

(出現頻度の高いもののみを取り上げたため、総計は100%にならない。表中の-は使用率0 (zero) を表す)

- (1) 〈韓国-カジュアル〉では、親しい先輩、友人に対して問いつめ表現が最も多い。また、先生に対しては話題 (内容) 言及表現が多く、聞き手の理解補助といった聞き手配慮型のストラテジー表現が特徴的である。
- (2) 韓国では、フォーマルな場面になるにつれて、根拠付け表現などの効果的な説得のための表現、すなわち目的達成のためのストラテジー表現が多くなる。ただし、

先生に対しては日本と同じパターンが見られ、先輩に関しても先生に対する場合のパターンと近くなる。

- (3) 日本では、カジュアルな場面とフォーマルな場面とで、聞き手の理解補助をねらった戦略が特徴的である。しかし、フォーマルな場面になるにつれ、話題（内容）言及表現が減り、（反対）意見保持表明は増える傾向がある。この傾向は韓国の言語行動にも見られるものである。

5. 2. 解釈

(a) 例(20)、例(21)は、聞き手の理解の補助をねらった戦略表現である。韓日ともにフォーマルな場面では例(21)のように言明すべきだという規範を認識していると思われる。

(20) 話題言及表現：「今度のゼミ旅行の場所だけ。」 [JM-CA-137-親・下]

(21) 反対保持表明：「今回のゼミ旅行の場所に関して反対意見があります。」

[JM-CA-137-親・下]

(b) 韓国ではフォーマルな場面になると、友人を相手にした場合により効果的に聞き手を説得するために使われた問いつめ表現が減り（カジュアル 49%→フォーマル8.1%）、根拠付け表現が増える（カジュアル4.1%→フォーマル40.5%）。問いつめ表現と根拠付け表現はより効果的に聞き手を説得するために使われた戦略表現である。このことから、韓国の談話支持戦略は、目的達成優先型と言えそうである。

例(22)の問いつめ表現は主にカジュアルな場面で使用されるが、聞き手に返答を要求することを目的としているのではなく、聞き手の意志・行動を批判し、攻撃するのが主な目的である。この種の発話は、聞き手領域に深く踏み込んだ発話であり、聞き手の気分を害しかねないものであるが、親しさを感じるからこそ用いられる「戦略的な用法」と理解される。例(23)は〈韓国-フォーマル〉で多く用いられる根拠付け表現である。話し手個人の意見ではなく、みんなの意見なのだと主張し、より効果的に説得するための根拠づくりを行っている。

(22) 問いつめ表現：「야 인마, 넌 왜 자꾸 거기 갈라구 그러냐? (こら、お前は何であそこばかり行こうとするんだ?)」 [KM-CA-102-親・同]

(23) 根拠付け表現：「다른 애들한테도 다 물어 봤는데요. (他のみんなにも聞いて
みたんですけど)」 [KF-F0-130-親・先生]

(c) また、韓国においては先生という特殊な聞き手を除くと、談話支持ストラテジー表現が場の改まり度によって異なることがわかる。カジュアルな場面に多かった問いつめ表現は聞き手領域に深く踏み込んだ発話であるため、フォーマルな場面では回避される。場が改まるほど、より効果的に聞き手を説得するために根拠付け表現が多く使われるのである。

(d) 日本において談話支持ストラテジー表現は、場の改まり度や聞き手との対人関係に関わりなく、聞き手の理解補助をねらったストラテジー表現が主なものであった。

6. おわりに

本稿では、話し手と聞き手との間の人間関係とカジュアル／フォーマルといった場の改まり度を変数として捉え、韓国人と日本人の言語行動に統合的な解釈を試みた。その結果をまとめると、以下ようになる。

(a) まず、行為指示表現に注目すると、〈韓国-カジュアル〉と〈韓国-フォーマル〉の間で顕著な差が見られ、韓国人のフォーマルなスピーチ・スタイルとは、文体が丁寧体になるだけでなく、行為指示表現の選択も異なることがわかった。具体的な行為指示表現には、聞き手領域に踏み込まず、聞き手に働きかけない希望文、判断文、非情報提供要求文などである。

(a-1) 多くの先行研究で韓国人は直接的な言い方をするという指摘は、〈韓国-カジュアル〉の友人・後輩を相手にした場合の言語行動に限って支持できるものである。具体的には、聞き手の行動を規制する訴え型など、聞き手領域に踏み込んだ発話が多く観察された。

(a-2) ただし、先生に対しては、カジュアルな場面とフォーマルな場面とで違いがなく、相手に働きかけない行為指示表現が選択されるのであった。このことから、先生という聞き手は、単なる上下関係の延長にあるのではなく、韓国の文化的に特異な聞き手として認定すべきだと思われる。

(b) 〈日本-カジュアル〉と〈日本-フォーマル〉とでは顕著な変化は認められなかった。これは、フォーマルな場面ではもちろんのこと、カジュアルな場面においても聞き手領域に踏み込まないように配慮している結果と考えられる。日本人は婉曲な言い方をすると

う従来の指摘はカジュアルな場面／フォーマル場面を問わず認められると言えよう。

(c) 談話支持ストラテジー表現の使い分けを分析した結果、韓国では目的達成優先型とでも言うべき表現が選択されることが多かった。また、韓国ではカジュアルな場面では問いつめ表現などの聞き手に働きかける度合いの強い表現が多用されるが、改まった場面では、根拠付け表現が多く選択されて、改まった場に特徴的な談話支持ストラテジー表現が存在することが確認された。ただし、ここでも先生に対しては例外的であり、(d)の日本の傾向と類似するものであった。

(d) 日本では場の改まり度による談話支持ストラテジー表現の使い分けに大きな差は見られず、聞き手の理解補助をねらったストラテジー表現が主なものであった。

本稿で取り上げたデータは計画的なインタビュー調査によって得られたものであり、話し手の頭の中にあるモデルとしての言語行動研究である。自然談話では会話の参加者同士で協調的に会話を作り上げていくダイナミックな展開が予想される。自然談話の資料を用いた考察を今後の課題としたい。

また、近年の日本の社会言語学研究では話者の持つフォーマルスタイルとカジュアルスタイルの記述やその切換えに注目した研究が盛んに行われている。今後韓国語のスタイル切換えの様相についても研究を進めて行きたいと思う。

【注】

- 1) MTとは、Membership Trainingのイニシャルをとったもので、韓国の大学における学科単位の年中行事である。通常2泊3日の日程で合宿を行う。学科の構成員の親睦を深めることを目的としており、強制性を帯びない自主的なものである。
- 2) 無効回答の詳細を表7に示す。

表7 無効回答

場面 \ 聞き手	先生	先輩	友人	後輩
〈韓国・カジュアル〉	4/3	0/8	0/5	0/5
〈韓国・フォーマル〉	12/1	2/0	2/1	3/1
〈日本・カジュアル〉	6/3	1/6	0/2	6/9
〈日本・フォーマル〉	12/4	6/3	5/3	10/4

表の読み方：反対意見不表明/提案不提示(単位：人数)

「反対意見の不表明」に関しては、韓日ともに先生という人間関係とフォーマルな場面に配慮しているようである。しかし日本では対後輩の場合にも多く見られ、目上に限らず目下にも気を使っていることがわかる。この点が韓国と異なる。一方、「提案の不提示」は、カジュアルな場面でより多く見られ、「問いかけ表現」のみ、あるいは「見せかけの賛成」で終わるもの

などがある。

- 3) 本稿で言う談話支持ストラテジー表現は、「前置き表現」と称されることが多いが、韓国語の談話においては随所に挿入され、自由な振る舞いを見せることから、「前置き表現」と称することはできない。なお、韓国の文献では、「前置き表現」という用語は見られず、「支持行為supportive move」という用語が使われている (Kim 1996)。
- 4) この分類は、井出 (1982、1991) とナカミズ (1992) の考え方による。井出 (1982、1991) は敬語ストラテジーの言語表現のレベル分類を行い、文レベルの要素と談話レベルの要素があるとしている。ナカミズ (1992) は、依頼発話行為を構成するストラテジーを「依頼を支持するストラテジー」・「理由節」・「依頼節」の三部分に分けて分析している。
- 5) 記号の読み方；JF：日本人女性、KM：韓国人男性、CA：カジュアルな場面、FO：フォーマルな場面、105：談話番号、疎・下：聞き手との関係
- 6) 回避義務とは、言語行動に生じる規制の中で、「行うべきでない」という言語行動を行わないことについての規制を指すものである (西尾2000)。
- 7) 査読者の方から表現類型のモダリティの具体形とその語用論的な効果が必ずしも一対一で対応するものではないというご指摘をいただいた。この点の究明を今後の課題としたい。

【参考文献】

- 李 吉鎔 (2001) 「日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究—談話構造とスキーマを中心として—」『阪大日本語研究』13 大阪大学文学研究科
- 井出祥子 (1982) 「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座 文化と社会』第5巻 大修館書店
 —— (1991) 「待遇表現」『講座 日本語と日本語教育』第12巻 (下) 明治書院
- 井出祥子・桜井千佳子 (1997) 「視点とモダリティの言語行動」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 任 榮哲 (2000) 「ことばと文化の日韓比較 <その3>」『言語』29-9
- 任 榮哲・李 先敏 (1995) 「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター
- 巖 延美 (1999) 「発話機能からみた日本語と韓国語の依頼の構造とストラテジー—談話完成テストの結果から—」『第4回研究大会予稿集』社会言語科学会
- 鈴木 睦 (1997) 「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則編『視点と言語行動』くろしお出版
- 中田智子 (1990) 「発話の特徴記述について—単位としてのmoveと分析の観点—」『日本語学』9-11
- 西尾純二 (2000) 「言語行動における遂行義務と回避義務」『阪大日本語研究』12号 大阪大学文学研究科
- ナカミズ・エレン (1992) 「日本語学習者における依頼表現—ストラテジーの使い分けを中心として—」『待兼山論叢』26 大阪大学文学会
- 韓 永玉 (2000) 「韓・日の依頼・断り表現の社会言語学的一考察—上下・親疎関係を中心に—」

- 任 栄哲編『日本人と話しことばⅡ』（私家版）韓国中央大学校
- 益岡隆志（1991）『モダリティの文法』くろしお出版
- 三牧陽子（2000）「丁寧体基調の発話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出—『働きかけ方式』のポライトネス・ストラテジーとして—」『大阪大学留学センター研究論集 多文化社会と留学生交流』4
- 宮地 裕（1995）「依頼表現の位置」『日本語学』14—10明治書院
- Brown, P. and S. Levinson, (1987) *Politeness : Some universals in language usage*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Kim, Kyung-Suk. (1996) Strategies for the Speech Acts of Request, Refusal, and Apology. *The Sociolinguistics Journal of Korea* 4-2.

【資料】

〈日本語刺激文〉

〇〇大学では、ゼミ旅行の行き先を毎年決まったところに行っていますが、多少費用がかかり、ありきたりの場所がらから、評判がよくありません。あなたは、それを不思議に思い、友人との会話の中で、「何でいつもそこなんだろう。もっといいところはたくさんあるんじゃないかな？」と言ったこともあり、内心反対です。

代表を務める（ ）は、例年にならって今年も同じところに行くことにしたいと言っています。反対意見を述べるときどのようにいいますか。

〈韓国語刺激文〉

〇〇대학에서는 MT 를 매년 같은 장소로 갑니다. 그러나, 비용도 많이 들고, 전혀 새로운 것이 없는 곳이라, 별로 인기가 없습니다. 그런데도 매년 같은 곳을 가는 것이 이상해서, 친구한테 “더 좋은 데도 많은데 왜 거기만 가지?” 라고 말한 적도 있을 정도로 내심 반대하는 입장입니다.

대표자인 ()는 이번에도 매년 가던 곳으로 가자고 합니다. 반대의견을 말할 때 어떻게 말씀하시겠습니까?

【（ ）内には、親疎関係、上下関係（先生、目上、同等、目下）をクロスさせた8人の聞き手が入る】

（博士後期課程学生）

（2002年7月25日 受付）

（2002年10月16日 修正版受付）

（2002年11月14日 再修正版受付）

（2002年12月2日 掲載決定）